



広安里 第7号

発行 釜山日本人学校
釜山広域市水営区民楽路 19 番道 11
TEL 051-753-4166
FAX 051-756-4851
<http://user.chollian.net/~pusjpnsc>

キャッチャー・イン・ザ・ライ

在釜山日本国総領事館 首席領事 大塚 剛

今年の四月、長男が就職し、社宅の独身寮に引っ越しました。さびしさより、肩の荷が下りた安堵感。22年の子育ては終わりましたが、親としては、最後まで「ビギナー」でした。

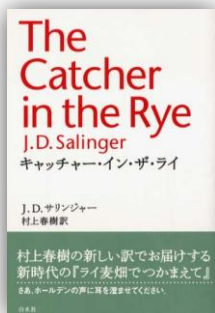
出産日のことはよく覚えています。五体無事の誕生だけを願いました。お産婆さんから赤ん坊を差し出された瞬間、「指は十本ありますか」と真顔で尋ねたほどです。余りに小さく、壊れそうな姿に、しばらく手が出ませんでした。

小学生になると、アルファベットさえ知らない子どもたちを連れて、海外に転勤しました。見知らぬ地での海外勤務は、仕事をする我々にとって大きな負担です。しかし、不安やプレッシャーの度合いからみれば、子どもたちの負担は比較になりません。

英語の発音が日系人みたいだとか、機械体操がへただとか、些細な事が気になりました。言葉も分からない現地校に入れられ、サバイバルで精一杯だった。それがよく分かっていたら、毎日、ニコニコ笑顔で、学校から帰ってきたことに感謝したはずでした。

「ライ麦畑でつかまえて (The Catcher in the Rye)」という米国の小説があります。学業不振で高校を退学させられた主人公ホールデンが、学校の寮から家に帰るまでの3日間の話です。主人公の行動は、とてもまともではないですが、ホールデンが妹から何になりたいのかと尋ねられて答える場面があります。

「でも、とにかくさ、だだっぴろいライ麦畑みたいところで、小さな子どもたちがいっぱい集まって何かのゲームをしているところを、僕はいつも思い浮かべちゃうんだ。何千人もの子どもたちがいるんだけど、ほかには誰もいない。つまりちゃんとした大人みたいなのは一人もいないんだよ。僕のほかにはね。それで僕はそのへんのクレイジーな崖っぷちに立っているわけさ。で、僕がそこで何をするかっていうとき、誰かその崖から落ちそうになる子どもがいると、かたっぱしからつかまえるんだよ。つまりさ、よく前を見ないで崖の方に走っていく子どもなんかいたら、どっからともなく現れて、その子をさっとキャッチするんだ。そういうのを朝から晩までずっとやっている。ライ麦畑のキャッチャー、僕はただそういうものになりたいんだ。」(村上春樹訳より)



私は、すぐれた「キャッチャー」にはなれませんでした。崖から落ちてから、慌てて谷底に拾いに行ったこともありました。逆に、危なくもないのに、声を荒げたことも少なくありません。思い返せば、なんであんな些細なことで怒ったのか。小学校卒業まで、絶対に叱らなければならないようなことは、本当はないのです。

子育ては、どの親にとっても、真剣です。誰もが、子どもの将来を考え、「正しい方向に」導きたい。だから、ひとつお願いします。叱らないで下さい。そして、叱らない分、褒めてあげて下さい。

私が百年後に残せるものは、何もないでしょう。しかし、子どもたちには、後生を託せます。人生の中で、もっとも大切な時間を過ごされている保護者の皆様方に、心の底よりエールを送ります。

ガンバレ！キャッチャーたち。